

第五十回中央教化研究会議 基調講演

近代日本における久遠本仏観

三輪 是法

司会 「近代日本における久遠本仏観」と題しまして、三輪是法先生にご講演いただきます。三輪先生、どうぞよろしくお願いいたします。

三輪 よろしくお願いいたします。身延山大学の三輪是法と申します。タイトルが「久遠本仏観」ということになっているのですが、久遠本仏という積尊がいらっしやるこの娑婆世界における時間の考え方、「久遠」という時間がどのように受けとめられているかということが話の中心になると思います。

まず資料の訂正です。一 ページ目、1 「久遠考」の①のIに「衝動的」とありますが、「情動的」の間違いなので、そこを訂正していただきたいと思えます。この言葉は、2の「日蓮聖人の生命観」Iにもあり、同様に訂正していただき、さらにその「情動的生命観」がそれぞれ1、2ともにIのカテゴリではなく、IIのカテゴリに入れていただきたいと思えます。人文的生命観、宗教的・哲学的生命観の方に「情動的生命観」が入ることです。それでは、発表させていただきます。

ご存じのとおり、法華経では、前半迹門と後半本門とで積尊が異なっています。迹門は始成正覚の積尊、本門は久

遠実成の釈尊です。日蓮宗は、庵谷先生のお話にもございましたように、本門の釈尊をご本尊として奠定しています。仏典全体を眺めてみると、テララワータ仏典では、釈尊は我々と同じように、やがて死に至る有限なる生命体として存在しているのに対して、大乘仏典では、釈尊以外の仏さまが誕生し、長い時間の中の修行が説かれるようになっていきます。そこで、「仏陀が無限の生命を持つ」ということは、どのような意味があるのか」という問いを立てたのですが、これはもう鈴木先生の解説で全て説明し終わっていると思いますので、ご参考にしていただいて、とりあえず、私が「久遠」ということについてどのように考えたかという、その軌跡についてお話ししたいと思います。

まず、生物学者である故・三木成夫氏が「生命には二つの見方がある」と言っています。それが資料のⅠの①のところです。その他に、名古屋大学の先生で岩崎秀雄氏という方は、やはり同じように、二つの見方を指摘しています。Ⅰが自然科学的生命観、機械論的生命観ですね。それから、Ⅱが人文学的生命観、あるいは情動的生命観というものになります。岩崎氏の説明によりますと、自然科学、思想、美学、芸術が、それぞれの時代で交錯しながら、「生命とは何か」という問いを発し続けてきた、としています。法華経の釈尊を説明する「久遠」という生命観は、宗教的あるいは文化的生命観だというように分類できるということになるわけです。また、現在立命館大学の教授をお勤めになっている小泉義之氏は著書『生殖の哲学』のなかで、生命を考察する場合に、「生命」「死」という言葉にだけとらわれるのではなく、解説が困難になる可能性があるけれども、「魂」とか「実存」「精神」「主観」という言葉を「生命」に置きかえる試みが必要だ、と指摘しています。この説明に基づけば、実際に久遠という時間概念を生命という視点から捉えた場合、生きる営みの中に生命を捉えて、恋愛や結婚、あるいは出産という人生の出来事に基づく夫婦や家族、さらに社会という拡散する人間関係に言及する必要もあると考えられます。

ところで、近代日本において起こった大正生命主義という人文学的生命論の興隆に対しまして、現代では自然科学

的生命論が主流になっていると考えられます。倫理学で生命倫理の問題を考えること、つまり急速な医学の進歩に倫理が追いついていないという現状をみれば、おわかりいただけると思います。このように、生命に対して二つの見方が存在する場合、日本において、自然科学的生命観と、「久遠」という時間の表現であらわされる宗教的哲学的生命観は、どのような意味を持つのでしょうか。

まず、近代の日蓮仏教の信仰者の久遠観を確認する前に、その出発点である日蓮聖人の久遠観、あるいは生命観を見ておきましょう。本来、仏教で説かれる生命論は、まさに生きる営みの中で命というものを捉えています。その最たる教えが生・老・病・死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦の「四苦八苦」と言えるでしょう。人生は苦であるということを認め、それを克服することが仏の教えであり、四諦八正道、十二縁起へと展開していきます。つまりその前提には、人は生まれ、病になり、老いを迎え、また死んでいくという機械論的生命観があるということになります。この機械論的生命観を真理として、「生は無常である」という教えが説かれ、やがて、宗教的・哲学的生命観である、「生命 \parallel 私」という人間には実体はないのだから執着してはならず、生命 \parallel 私という人間に執着しないことによって、四苦八苦という生命観から離れることができる」という教えに結実していく。そこに、仏教という解脱、生死という苦にとらわれることのない自由が実現していきます。

その他にも、十界思想と結びついた、苦である生死が繰り返す輪廻転生という生命論や、自然科学的生命観でもあります生物の生まれ方による分類、四生というものも存在し、仏教倫理を形成する基底となっています。つまり仏教は、人間は生まれ死ぬという機械論的生命観に基づき、宗教的・哲学的生命観によって、四苦八苦を克服するための倫理を成立させているということになると思います。

日蓮聖人も、生命の発生を自然科学的に認識されています。それは、父母によって生じて不浄なる存在だという認識です。資料の2のIの①です。「我等は父母の精血変じて人となりて候へば」というところです。父母という、セ

クシャリテイから生まれた生命は、仏教においては不浄の源であつて、つづけて②を見てみますと、無常であることを示されています。そしてⅡの①のように仏教が説く宗教的哲学的生命観によつて、清浄なる存在へと変成しなければならぬ、と導かれています。日蓮聖人の御遺文には、随所に、この生死について説かれたものがありまして、その言葉は、仏教本来の教えに基づいて、衆生にとつて、生死を離れるための教えが仏教であり、その中でも、法華経こそが必要な教えであることが示されます。生死を離れるということは、言いかえると、六道輪廻、あるいは四生を離れることであつて、資料にはあげ忘れてしまいました。『撰時抄』（定遺一〇一七頁）には「生死を離るる道には法華経の結縁なき者のためには未顕真実なれども、六道・四生・三世の事を記し給いけるは寸分もたがはざりけるにや」というような一節がございます。六道・四生は、過去、現在、未来という三世のつながりの中で生死を繰り返し、その繰り返しを断ち切るために仏教があります。日蓮聖人の場合は、結縁、あるいは謗法一闡提の成仏という重要な問題が必然的にありますけれども、輪廻思想のなかで捉えられているということになると思います。

こうした仏教が説く生きる営みとしての生命観は、法華経の中にも当然説かれることですから、法華経を代表する最も重要な生命論が、教主釈尊の久遠の生命が開顕されることです。第十六の章、如来寿命品を待つまでもなく、法華経は過去の因縁譚として、随所に時間の無限性が説かれています。具体的には、化城喩品の三千塵点劫、あるいは常不軽菩薩品では常不軽菩薩が何世にもわたつて常不軽菩薩として生まれるという物語、あるいは、迹門で説かれる授記もそのようなのですが、釈尊が舍利弗や四大声聞に、直ちに仏になると示すのではなくて、はるか未来に成仏する確約を与えるということも挙げられます。実は発表すると長くなるので資料にまったくあげなかったのですが、先に講演された先生方がまだ触れていない天台大師智顛の『法華文句』の「釈寿命品」に基づいて久遠の解釈を確認してみたいと思います。

天台大師は『我本行』より下は、因を擧げて果を況え、以て常住を明かす。（中略）経は因を擧げて果を況う、果

は数に非ざるなり」、さらに『経』に『久修業所得寿命無數劫』というは、神通延寿に非ざるなり」と述べられます。その理由については、円教によって菩薩の位に入って煩惱を滅していく段階で生死を超越するのであって、これを言いかえますと、悟る主体の内面における変化によって常住を得るということとなります。

天台大師の「如来寿量」についての解説には二つの視点があるようで、一つが法華経迹門十四品に基づく始覚的視点、もう一つが本門十四品久遠の視点で読む常在的視点です。前者の場合は、仏の境地に至る必要があつて、方便品で「唯仏与仏乃能究竟」と説かれますように、凡夫と仏との生命観の違いが明確にあらわれていて、成仏の困難性が認識されています。それに対して、本門の視点では、釈尊がこの娑婆世界に久遠の時間、常に存在し続けているということの説明は、仏身の成就を三身全て法身に基づいて説明されます。原文に触れずに申し上げます。真如である法身は、本来非生非滅であります。煩惱を説くのは衆生が迷心を起こして執着することを恐れていることです。煩惱と智慧は相反しながら生じます。煩惱を段階的に滅していき、知恵によって正しい見方ができるようになれば、これは無常の滅、つまり生死を離れることができます。智慧が生じ、その都度、煩惱を滅していくことができれば、寂滅、仏の境地そのものになります。つまり、非生非滅である法身を説くのは無常の滅を説くことで、生死を離れさせるためです。仏の智慧を示す報身は、既に生死を離れているのであるから、本来、非生非滅と言うべきところですが、人によって智慧を身に着けた者、煩惱を持っている者の双方が存在し、仏の境地を誤解しています。知恵である報身と真如である法身を体得した応身についても同様に、法身に基づけば、不滅の要因を持つこととなります。三身の非生非滅を説けば、衆生が仏を請い慕う心を抱いてしまいが故に入滅することを示すのだ、と説明しています。つまり、無常入滅を説くのは衆生を救済するためであつて、覚者たる釈尊は、真理を見きわめる智慧を持って、真理を体得した者であるのですから、存在それ自体が真理そのものともいえます。

この解釈の発生する如来寿量品の経文、「今、実の滅度、あらざれども」という句に着目すれば、滅することが実

の滅度でないことは明らかです。仏が道理としての真如そのものであるならば、衆生が生きる世界、この娑婆世界において永遠不変な存在となり、あらゆる物事や出来事はそこから派生したものと考えられます。このことを天台大師は『法華玄義』で、本迹を六種に解釈する第一番目に挙げています。これも資料に挙げてないのですが、まとめて言いますと、あらゆる物事や出来事は道理の上に成り立っている、物事や出来事は道理によって説明され、道理は物事や出来事から導かれる、真如である理と出来事である事は、必要十分な関係にあり、一体です。天台大師は、このようにして本迹の関係を解説するところで、法身と応身の関係を述べています。「最初に修行して理に契ふに由りて法身を証するを本と為す。初め法身の本を得るが故に、体に即して応身の用を起す」、さらに、「最初、久遠に、実に法応二身を得るを、皆、名づけて本となす」というふうに説明されるのですが、法身の「本」に対して応身を「迹」とした上で、久遠の法身、応身が本来の姿であると説明されるのです。

『法華玄義』では、本迹は本来一体であることを踏まえて、本門のすぐれた十種の教え、本門の十妙を解説していきます。とりわけ、最初に示される本因妙、本果妙、本国土妙は、日蓮聖人が立正安国実現の理論的根柢として重視するところでもあり、本迹一体ということを踏まえれば、久遠仏釈尊の存在そのものがこの娑婆世界の道理であり、そこに環境を含めた自然科学的生命論の規範が存在していることとなります。つまり、仏教を離れて一般的表現で言いますと、地球上の全ての生命現象は、その研究分析によって真理として明らかになるのであって、真理として明らかになったときに永遠性を持つことになる、覚者たる主体と真理という客体は、不思議一であり、本たる真理は迹たる久遠仏に派生し、次いで久遠仏は本として迹たる生命現象を含めたさまざまな自然現象に顕れるという関係になっていることがわかります。

資料に戻りまして、次に、法華経が示す久遠という時間の中に常に身を置かれている日蓮聖人について、確認していきたいと思います。Ⅱの①です。「我も法をえたり、我も生死をはなれなんとはいえども」ということで、その

次にめくっていただいて、「真言の元祖云々」というところがありますけども、日蓮聖人にとって結果的に生死を離れる過程で、その先にどのような生に至るかが問題になっています。つまり、ここに久遠という三世にわたる信仰という倫理が姿をあらわします。生死、六道、四生を離れるために、仏教が、特に末法、五五百歳の時代には法華経が必要であって、生きる今に題目の良薬に基づかなければならないとしながらも、その果報は未来、来世において顕れ、正法によらなければ生死を離れられず、邪法によって生死を離れなかった者でも、悔い改めれば地獄に堕ちない者もいる、というような説明をされています。

日蓮聖人は、仏教とそれ以外の宗教を比較対照する際に、三世にわたる教えか、そうではないかということを基準に説明されます。その基底にあるのは、やはり報恩思想というものだと思います。皆さん、よくご存じの『開目抄』の一節ですね。「儒家の孝養は今生にかぎる云々」（定遺五九〇頁）という一節です。『千日尼御前御返事』、これは資料に挙げてはいないのですが、「しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ、値がたくして仏法に値奉る。一切の仏法の中に法華経に値まいらせて候。其恩徳をもへば父母の恩・国主の恩・一切衆生の恩なり。」（定遺一五四二頁）というように述べられております。これは、先日、日本仏教学会で駒澤大学の先生の、道元禪師のご発表で、『正法眼蔵』の十二巻本の中に「あい難き仏法にあえた」というようなことが、生生世世という時間の中、やはり輪廻転生しながら仏教に値うのが我々衆生の宿命であるという説がやはりあるのだということを知って、祖師たちに同じような時間概念があるということを勉強しました。

日蓮聖人は、存在の無常性を踏まえて仏教に値えることを恩として受け入れられているわけです。人として生まれるということ、その結果、仏教に出会えること、仏教の中でも、仏の金言である法華経を信仰し弘められること、その結果自らが経験することは、たとえ、それが厳しい現実であっても、全てに恩を思う日蓮聖人がいらっしやるわけです。その根幹に、教主釈尊に対する恩が確認できます。日蓮聖人は、この娑婆世界が久遠仏釈尊の所領であると認

識されています。これも道元禪師と同じなのですが、『一谷入道殿御書』では「娑婆世界は五百塵点劫より已來教主 釈尊の御所領なり」（定遺九九二頁）という表現がございます。この御遺文も資料になくて申し訳ありません。娑婆世界は、さまざまな生命を含めて、全て久遠仏釈尊とともにある。つまり、娑婆世界は主である釈尊のご所領であるという認識ですね。その故に、最も重要な恩があるということを書べられるわけです。

ご承知の通り、日蓮聖人は久遠の教主釈尊に主師親三徳を見られています。その基底にあるのは釈尊自身の報恩があるということです。日蓮聖人は、娑婆世界には六道・四生の衆生が大半であり、釈尊は自らの父母である一切衆生を仏とするために、つまり孝養を実践するために法華経を説いたということを『法蓮抄』で述べられています。それが②の資料です。釈尊が久遠の間、修行して仏となって法華経を説くのは、六道・四生の衆生を成仏させるためであり、それは父母に対する孝養である。なぜならば、生命の存続を三世にわたり久遠の時間の中で考えたとき、全ての人々が、今のわれわれを生んだ父母と考えられるからである。日蓮聖人は、衆生の生命のつながりを常に三世という時間の中で認識されて、報恩思想を重視されています。そして、恩というものは、これも資料に挙げていないのですが、『妙一尼御前御返事』で「この恩はかへりてつかへたてまつり候ふべし」（定遺一〇〇一頁）と、親の恩に報いるということはとても重要なことだと示されています。

『法蓮抄』の続きをみていきます。生死を離れるという目的の他に、未来世において六道・四生に再誕しないことが重要です。二乗でもいけない。二乗は不知恩であり、一切衆生への孝養がないために、成仏できない。ただ二乗を仏にできる教えである法華経を信じる人だけに釈尊は父母孝養の功德を与え、成仏の道を開かれたと述べられています。三世にわたる報恩思想というのは、必然的に通時的道德を形成します。それは現代日本に根強く残る祖先崇拜と結びついて、死者と生者とのつながりを強固にします。資料Ⅱ③と④です。「聖霊」という言葉のところです。日本人、あるいはもっと大きく万国共通と言ってもいいかもしれませんが、日蓮聖人も同じように、死者の魂が存在すると認

識されています。その魂は仏となつて、釈尊が法華經を説く靈鷲山に詣る。その契機となるのが唱題であり、一生という生命の単位、あるいは無始という生命の営みの中で仏の種を植えることによつて即身成佛する。その身がそのまま仏となるということは、煩惱と菩提、生死と涅槃という対立を止揚した境地に至ることになります。仏になつたときに靈魂は法華經の世界に生きることになります。それが④の表現になっています。日蓮聖人が説く成仏論は、仏になるための種を植え、成長させ、やがて仏となるという天台教学に説かれた三益論で考えられていることはご承知のとおりです。日蓮聖人の仏になるための種は、一念三千の成仏原理を保証した妙法蓮華經の題目であり、仏教が減び行く末法の時代には下種が必要であることが、『観心本尊抄』で強調されるわけです。「種」というのは生物学的にみて生命の源であつて、その種を下し育てる役割は親が持つている。仏となる生命、つまり一切衆生の成仏を日蓮聖人が誓願する以上、例えば、『頼基陳状』の中では、「日本の父母は、私、日蓮である」というような自覚的表現、もちろん無量義經の經説のとおり、久遠仏釈尊を父、經典を母と称することは当然あるわけですが、同様に、日蓮聖人ご自身が父母であるというような表記も見られます。こうした自覚的表現が日蓮聖人の筆に現れるということも、自然なことなのではないかと思われまます。

そこで、今度は引き続き、近代の日本仏教信仰者の久遠解釈について見ていきたいと思ひます。先ほど申し上げましたとおり、タイトルは「久遠本仏観」ですが、その「久遠本仏」という言い方、例えば牧口とか戸田城聖の創価学会の人たちの見方というのは、やはり正宗教学、庵谷先生のご講演にあつた日寛教学に基づいていると思ひます。教学的視点で言えば、「本仏観」に比重が置かれるのですが、ここではあくまでも久遠性、久遠という時間概念をどのように捉えているかということを見ていきたいと思ひます。

近代日本において、明治末期から生命をさまざまな思想の中心に据える文芸運動が興りました。これが大正生命主義です。大正生命主義を鈴木貞美氏の研究に基づいてまとめますと、「生命を原理の核に添えて、生きるという

ことを積極的に捉え、打ち出し、個人主義的側面を持つ運動」ということになります。簡単にいってしまえば、個人個人の命を絶対的に尊重するということです。ただし、同時に全体主義に向かう傾向もあるといわれています。既に確認しましたように、日蓮聖人の仏教が示す生命というのは、法華経に基づく三世という時間の中で捉えられています。その根拠は如来寿命品の久遠の時間にあります。久遠の命を持つことを釈尊が自ら告げ、この教説を受けて日蓮聖人は、釈尊の所領である娑婆世界と、そこに存在する衆生も永遠の生を持つと説明されます。それは久遠という時間における生命の営みであり、生死を超克した境地であるとともに、死後、靈的に存在し続け、法華経の世界へと至る生命体でもあります。もちろん、久遠の生命は機械論的生命論ではありません。機械的生命に久遠の時間を持たせるためには、宗教的哲学的生命観が必要とされます。ここに日蓮聖人の仏教、この根幹たる法華思想が介在しています。生命は生死を離れて、あるいは生死を考へることなく、久遠性を生き続けるということから、生命は積極的に捉えられ、生命を原動力として行動化されていく。

鈴木氏が指摘する生命主義の特徴に基づけば、日蓮仏教の久遠という時間概念は、永遠性によって生命の有限性、つまり、生死を離れさせ、生命に関わるさまざまな執着を離れさせることから積極的に生き方を見だし、自由な境地から創造性へとつながっていくと考えられます。ただし、生命の有限性を自覚することで、その価値を高め、積極的に生き方を見だしていくという、逆の立場もあります。また、菩薩行という自行化他の修行を実践することで、二乗の自行だけの個人主義ではなく、全体主義へと結びつき、立正安国の理念へとつながっていきます。つまり、日蓮仏教の持つ久遠本仏論は、生命主義へと結びつく可能性を多分に持っている、あるいは「生命主義である」と言い切ってもいいのかもしれない。

そこでまず、日蓮主義の主導者で国柱会の創始者である田中智学の久遠解釈を確認してみたいと思います。田中は、文学者の高山樗牛や宮沢賢治、軍人の石原莞爾といった人物に大きな影響を与えました。その思想の特徴は、自らが

定義する復古主義であって、日蓮仏教の教義を近代化するのではなく、日蓮聖人に戻すという考え方です。日蓮聖人の思想を近代に迎合させず、折伏によって広めるといふもので、当時の既成教団のあり方、僧侶のあり方に一石を投じました。教義的には天台中心ではなく、日蓮仏教、すなわち御遺文を中心に構築され、そこに、時代に適応した言説で説明を加えたものです。田中が目指すところは、日蓮仏教による思想の統一です。その結果、平和を実現するというように説きます。それが3I①の文章です。

思想の統一というのは、法華経の開顯思想に基づいて、日蓮聖人同様、複数の価値観を一元化するということです。特に思想の中心に置かれるのが本門寿量品です。これが②です。「我々の住む娑婆世界には久遠仏釈尊の身体が息づき、かつ、常に慈悲をもって救済してくださっている。」この田中の言葉には、娑婆世界は教主釈尊のご所領と説く日蓮聖人の娑婆世界観が根底にあり、孝恩思想も確認できます。田中は、その一教主が説く一法に導かれて苦を逃れられるとし、資料④のように、この世界の現象全てが仏の国土である常寂光土の事実であるということを示しています。

③を見ていただきたいのですが、田中は、生死を離れるのは心の問題である。煩惱を生み出すのは身体の問題だと言っています。資料に挙げなかったのですが、「元来、吾人の煩惱というのは心が主であるが、専らその実行する時は身体に委任している」というような表現があります。詳細には「五根五識の働きが煩惱を生み出し、その煩惱が意根、意識に達する。従って、この身体は煩惱の製造機械であり、心を滅するのではなく、身体を克服する必要がある」と言っています。

田中は寿量品の五百億塵点劫を解釈するところで次のように述べています。今度は⑤ですね。わかりやすい文で言えば「如来の寿量ははかることはできないが、物質の寿命、凡夫の身体の寿命は年数をはかれる。身体の成仏、即身成仏を説くのは寿量品で如来の寿命の長遠が明らかとなって、有限の物質的世界が無限の常寂光土に回帰されなければ

ばならない。その結果、凡夫は生死を離れ、苦から解放されて自由になる。」田中は、成仏について、迹門と本門に分けて考えています。迹門では、諸仏は理と事ともに自在であるが、衆生は心である理において自在であり、事Ⅱ身体が、理Ⅱ心に基づく以上、成仏修行は観心になる。他方、本門の成仏は、「仏になるといふのではなく、本来仏身なり仏子なりと知って、仏の所作をこの肉身の上に」実現することである。「吾人の身体は、久遠実成の本仏果海の功德の上に影現せられつゝある身」であることを覚知し、身体という事相を変換させなければならないと説きます。これが事の一念三千に基づく色法成仏であるというわけです。久遠の開顕こそが即身成仏を事実にし、法華経が説く大いなる自由を実現することができる。田中は、法華経寿量品に基づく久遠釈尊、我々衆生との関係から導かれる個人的生き方を示し、全体主義的国家人生を示します。宗教と国家、国家と一個人の人生というものを結びつけて、国体ということ説いていくわけです。

次に佐藤鉄太郎です。なぜ佐藤を取り上げたのかと言いますと、佐藤は、本多日生の影響があつて、「靈魂」というものをすぐ強調するわけです。常住不滅の靈魂が、肉体が減びた後に人びとの口の端から出て、「人に感化指導する」と言っています。今世で有名になって、今世で一生懸命徳を積んだ人は、その人が死んで魂となった後の世でも、影響を与えつづけるということで、人間の働きは途絶えることなく常に不滅であると説いています。佐藤の生命論は常住不滅の靈魂を基底に語られていて、人間は久遠の昔から存在しつづけて、偶然性を持って現実に生を受けるという考え方をしています。時間の関係上、佐藤の久遠解釈はこのくらいにしまして、重要な創価学会の久遠解釈に移りたいと思います。

やはり、牧口常三郎の久遠解釈から戸田城聖へとつなげて見る必要がありますので、牧口の生命論をまず見ておきたいと思います。牧口が示す生命は、生きる営みにあります。人間が生きる上において重要なことは目的ですね。目的を持って生きているわけですから、その目的をどのように定めるかを問題にしています。その前提となるのが、資

料Ⅲ①で、これはやはり寿命品の久遠仏が、その目的を設定する根拠になっているということです。②も読んでいただければと思います。個人が生きる目的は、究極の目的である世界のあり方であって、つづいて国家というように、大きな存在のあり方が決定しなければ、小さな有機体全体である家族、さらに私たち一人一人のあり方も決定しません。その目的をつかさどるものが、三世にわたる因果の法則です。この法則を理解してこそ目的が定められます。牧口は、個という有機体から始まって、小さな有機体である家族、そして有機体全体の国家、世界へとという段階を踏まえて、その逆の順序で成立する生きる目的を見ていきます。個は常に家族の、家族は常に国家の、国家は常に世界という全体の目的をみつつ、個人主義的生活や独善主義的生活を離れて、自他ともに共榮することによって初めて、完全円満なる幸福に達し得る真実なる全体主義的生活を実現できる、というわけです。個人の生命体というのは、生活力発動の機関であり、われわれの生活力は宇宙に備わっている大生活力、すなわち、これが久遠仏の解釈、久遠という時空間の解釈に基づいているわけですが、生活力の大本たる大法、法華経を生活法と定めなければならないというわけです。少し省略して解説しましたが、それが資料の③です。

つづけて、④です。法華経に説かれる久遠というのは、無限なる時空間、精神と物質を包摂する宇宙、この宇宙という表現がよく学会では使われますけども、久遠は宇宙の因果であって、最大価値の生活法となります。その極意が一念三千です。一念三千は特殊な教えではない、私たちの日常生活の法則である、という言い方をしていますけれども、その究極の教えは、牧口の教育論へと接続していくということになります。法華経の如来寿命品に基づく師弟の遠近不遠近相がもたっています。資料の⑤ですね。「甚だしきは、それを示す教祖自らが感化の当体となって、永久に差別待遇の地位たる師弟相對を脱せざらしめるに對して、それ等の宗教を超越した仏教の究極に至ると、諸仏はすべて同等の地位になり、仏の親たる法即ち無常最大の妙法の功德を讚歎し、衆生の生活の向かうべき無常最大の動きを示し、これに直達の方法を授けるのである」という、実に強い言い方をするわけです。

以上の牧口の久遠解釈を踏まえて、最後に、戸田城聖の久遠について確認しておきたいと思います。戸田もやはり「三世の中での生活」と言っています。⑥の文章です。因果という必然性にある生活ですね。「私たちが今、このように生きているのは必然性を持っているのだ」ということです。ただし、それは本源的ではない。生命現象は「偶発的にこの世に発生し、死ねば泡沫のごとく消えてなくなる」と考えるだけではいけない。戸田は久遠に關しまして、独自の解釈をしています。佐藤鉄太郎などとは全く違う。久遠の存在は靈魂という存在ではないと言います。それが⑦の資料なのですが、これは日興上人の『御義口伝』の久遠解釈をそのまま継承しています。⑧に『御義口伝』の文章を挙げておきましたけども、「久遠とは、はたらかさず、つくるわず、もとのまま」というように説かれている。瞬間と久遠の相關において久遠を説明します。久遠とは瞬間の連続、今あることの連続であり、今ある生命が既に久遠をはらんでいる、という見方です。生命の発生については⑨のように述べられていますけれども、生命は偶然誕生するのではなく、かといって因果論に基づく必然性だけで説明できるものでもない。久遠は因果という時間経過では説明できない。「宇宙とともに存在し、宇宙より先でもなければ、後から偶発的に」できるものでもない。宇宙自体が生命であり、宇宙に生命が潜在しているということです。ですから、宇宙があり続ける限り生命は存在しつづける。⑩で述べるように、生命が永遠であるということ、久遠であるということは決して観念的・遺伝的なものではなく、地球が減びようとも生命は存在しつづけるということです。

大急ぎで申しわけありませんでした。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 三輪先生、どうもありがとうございました。